リニューアルオープン記念

特別展「芦屋の美術、もうひとつの起点　ー伊藤継郎」

会　　期	―	2023年4月15日(土)－7月2日(日)
休 館 日	―	月曜日
開館時間	―	10:00－17:00(入館は 16:30 まで)
会　　場	―	芦屋市立美術博物館
観 覧 料	―	一般 800(640)円、大高生 600(480)円、中学生以下無料 ※ 歴史資料展示室の観覧料も含む ※ (　)内は 20 名以上の団体料金 ※ 高齢者(65 歳以上)および身体障がい者手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちの方ならびにその介護者の方は各当日料金の半額になります。 ※ 無料観覧日　5月5日(金・祝)、20 日(土)、21 日(日)
主　　催	―	芦屋市立美術博物館
後　　援	―	兵庫県、兵庫県教育委員会、公益財団法人兵庫県芸術文化協会、神戸新聞社、NHK 神戸放送局、Kiss FM KOBE
助　　成	―	公益財団法人　朝日新聞文化財団

展覧会概要

芦屋の地で描き続けた画家、伊藤継郎（いとうつぐろう 1907-1994 年）をご存知でしょうか。

伊藤は大阪の画塾で学び、1928 年に芦屋へ転居、この地にアトリエを構えます。複数の美術団体展に出品して研鑽を積んだのち、1941 年に新制作派協会（現・新制作協会）へ入会、発表の拠点と定めました。温厚な人柄の伊藤を慕って、芦屋のアトリエには画家仲間や文化人が集ったほか、絵画教室も開かれ多くの人々が学びます。1948 年には芦屋市美術協会の創立に参加。その中心人物として、芦屋市展や童美展（児童対象の公募展）の審査を務めました。このように、昭和から平成にかけて芦屋の美術の中心には、伊藤の存在があったのです。

伊藤の絵画は、日常の一場面や人物、動物、旅先の風景や異国の人々など、自らが心惹かれたモチーフを見つめ、愛情豊かに描くものでした。友人の小磯良平は、伊藤のモチーフのとらえ方を「眼の前にあるものが彼の頭の中を通過することによって、忽然として彼の造形に変化して出て来る」（『なにわ会シリーズ小冊子「伊藤継郎」』梅田画廊、1966 年）と評します。その絵肌は、絵具をあつかう独自の方法によって、実に質感豊かです。「ものを見て、絵具で描く」―伊藤はこれ以上なくシンプルな絵画のあり方を探求しましたが、生み出したのは、彼にしか描けない絵でありました。

当館は 1991 年の開館の年、伊藤継郎の回顧展を開催しました。このたび 32 年ぶりに、没後としては初の大規模な伊藤継郎展を開催します。約 60 点の伊藤作品とともに、伊藤が画家として歩む中で交流した 20 名の多彩な画家たちの作品を展観し、当時の洋画界の様相をご覧いただきます。そして、唯一無二な伊藤絵画の内実に「モチーフ」「技法」という観点から迫り、伊藤の画業の再検証を試みます。

何を、どう、描くのか―。伊藤の絵画を通して、絵を描くとはどういうことかと、考える機会となりましたら幸いです。

本展の見どころ

（1）芦屋の地に生きた、ひとりの画家。伊藤継郎の実像に迫る。

伊藤の作品約 60 点とあわせて、彼が残したエッセイや絵画論、多数の写真資料を展示します。
画家として生きるとは、どういうことか―。伊藤絵画の独自性に迫るとともに、多くの人々に慕われた画家の素顔に触れていただきます。

伊藤遺族や芦屋市の施設が所蔵する、公立美術館では初公開となる作品たちも複数展示。

（2）伊藤が画家として歩む中で交流した、20 名の多彩な画家の作品を展示。

大阪に生まれ、青年期より終生芦屋に暮らした伊藤。その画業は、関西の洋画界の歩みと重なります。本展では伊藤が交流した多彩な画家たちを、その作品や資料から紹介します。関西の洋画史におけるスターたちの作品が、伊藤を起点に、一堂に会する機会。それぞれの画家の新たな一面を、垣間見ることができるでしょう。

（3）様々なイベント、ワークショップを実施します。

伊藤は、子どもから大人まで多くの「描く人」を温かなまなざしで見守りました。
本展の関連イベントとして、伊藤が残した技法書やエッセイ、アトリエでの様子を紐解きながら、絵を描くことの楽しさや難しさを味わうワークショップを開催します。また、神戸市立小磯記念美術館に長く勤務され、新制作派協会や小磯良平をはじめとする会員たちについて研究されている廣田生馬氏をお招きし、新制作派協会やその会員たちについてお話を伺います。

出品作家

伊藤継郎
松原三五郎、赤松麟作、黒田重太郎、小出楢重、鍋井克之、古家新、田川寛一、猪熊弦一郎、小磯良平、田村孝之介、小松益喜、山本直治、吉原治良、井上覺造、藤井二郎、松井正、吉田一夫、西村元三朗、白髪一雄、村上三郎

展覧会構成

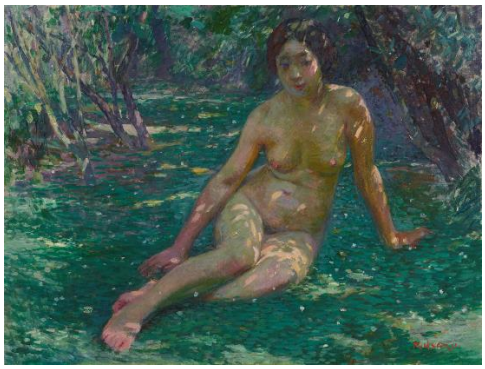
本展では、伊藤継郎の画業を**5章構成**で紹介します。作品**約 80 点**、資料**約 30 点**を展示予定。

---

1 学び ―大阪の洋画界を背景に

伊藤継郎は 1907 年、大日本紡績会社重役であった伊藤粂太郎の次男として、大阪に生まれました。1923 年より、洋画家・松原三五郎が主宰する天彩画塾、翌年赤松麟作の赤松洋画塾（1926 年には赤松洋画研究所と改称）に通います。ともに岡山出身の洋画家が開いたこれらの画塾は、大阪の洋画教育の草分けでした。1931 年頃からは、鍋井克之、小出楢重、黒田重太郎、国枝金三によって 1924 年に創立された信濃橋洋画研究所にて学びます。伊藤はここで多くの画友と出会いつつ学びを深め、個性を伸ばしていきます。

第1章では、伊藤の画業の前奏として、彼が学んだ大阪洋画界の画家たちの作品をご覧いただきます。



1．赤松麟作《裸婦》昭和初期
油彩、布　大阪中之島美術館蔵

2．小出楢重《横たわる裸女 A》1928 年
油彩、布　当館蔵　第 15 回二科美術展覧会

2 研鑽 ―美術団体での活躍

伊藤は 1928 年に病気の療養を兼ねて芦屋へ転居します。1930 年第 17 回二科美術展覧会に初入選を果たし、気鋭の青年画家として注目を集めます。同年に兵庫県美術家連盟の創立に参加。兵庫県内の画家たちとも交流を持ちました。1930 年代に伊藤は、二科会や兵庫県美術家連盟をはじめ、新美術家協会、艸園会、全関西洋画展など複数の美術団体展へ出品を重ね、研鑽を積みました。1937 年、第 24 回二科美術展覧会に《鳩を配した裸婦》などを出品し会友へ推挙されます。

第2章では、伊藤が画家として歩み始めた 1930 年代の作品とともに、伊藤が交流した関西における同世代の画家たちの作品を展観し、当時の洋画界の様相を振り返ります。

3．伊藤継郎《鳩を配した裸婦》1937 年
油彩、布　当館蔵　第 24 回二科美術展覧会

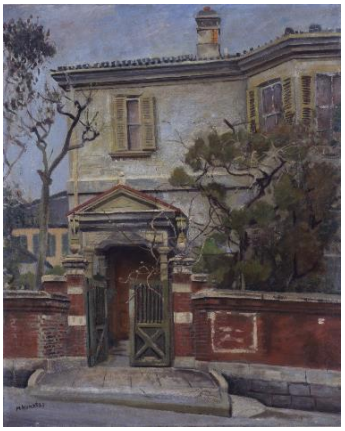
4．田村孝之介《黄衣婦人像》1936 年　油彩、布
神戸市立博物館蔵　第 10 回全関西洋画展

3 開花 ―新制作派協会

伊藤は 1941 年に二科会を退き、小磯良平、猪熊弦一郎らの誘いによって新制作派協会（1951 年に新制作協会と改称）の会員となります。新制作派協会は、国家が美術界を統制しようとした 1935 年の帝展改組に端を発し、純粋な芸術上の探求のみを求めた精鋭たちの集団で、当時の美術界に清新な風をもたらしていました。特に小磯良平とは 1930 年頃から交流があり、1940 年にはともに沖縄や岡山を旅行しています。気の置けない仲間の存在に導かれての参加だったのでしょう。以降、伊藤はこの会を発表の拠点と定め、独自の画風を展開していきます。

第3章では、伊藤および小磯、猪熊、小松益喜、西村元三朗の作品を展観し、各々が独自の作風を探究した新制作派協会の一端をご覧いただきます。

5．伊藤継郎《二人の司教》1968 年
油彩、布　当館蔵　第 32 回新制作協会展



6．小松益喜《古風な門・古風な家》1936-37 年頃
油彩、布　神戸ゆかりの美術館蔵　第 3 回新制作派協会展

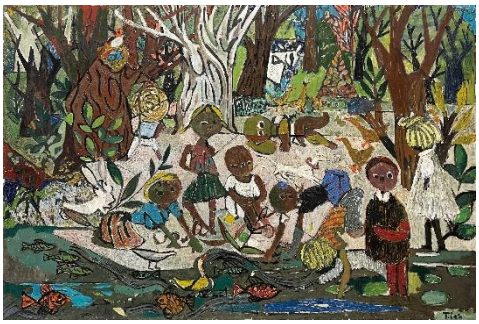
4 再出発 ―芦屋の地で

戦時中、伊藤は満州へ出征し、戦後約 1 年間の過酷なシベリア抑留を経て復員します。伊藤の芦屋の住居とアトリエは、幸いにも戦災を逃れ無事であり、ここに住居やアトリエを失った小磯良平や田村孝之介をはじめ画家仲間や文化人が集い、学びや交流の場となりました。小磯や田村、西村元三朗らはここで同じモデルを囲み、裸婦の研究をともにしています。新制作派協会の研究所も置かれ、白髪一雄や村上三郎が通いました。この頃から自宅で絵画教室も開かれ、子どもから大人まで、多くの人々が学びました。1948 年には芦屋市美術協会の結成に参加、吉原治良らと芦屋市展や童美展の審査を務め、講習会を開催するなどしました。吉原が逝去した 1972 年からは代表を務めています。

第 4 章では、戦後の伊藤のアトリエに集った画家たちと、芦屋市美術協会創立メンバーの作品を展観します。戦後の復興期における各画家たちの活動と芦屋の文化の歩みにおいて、伊藤の果たした役割を振り返ります。

7．伊藤継郎《裸婦》1947 年　油彩、布
芦屋市蔵 第 1 回芦屋市美術展覧会

8．田村孝之介《裸婦習作》1947 年頃
油彩、布　神戸ゆかりの美術館蔵



10. 伊藤継郎《無題》1953 年頃　油彩、布　芦屋市立山手小学校蔵

9．白髪一雄《文》1954 年　油彩、布　当館蔵

5 伊藤絵画の内実

伊藤は自らの生活や旅先における身近な対象をモチーフに描き続けました。モチーフの観察に始まり、絵具の物質的な特性を生かして描く姿は、絵筆をもったことがある者なら誰しもが経験する、時代が移ろう中でも不変な「絵を描く」という行為の根幹です。

第5章では、伊藤の絵画および素描作品を、彼が残した技法書やエッセイ等の資料とともに展示し、彼独自の美意識や制作プロセスを明らかにします。「モチーフ」「技法・素材」という観点から、伊藤独自の絵画論、ひいては「絵を描くとはどういうことか」という根源的な問いに迫ります。

11. 伊藤継郎《猫のいる風景》1940 年頃
油彩、布　当館蔵

12. 伊藤継郎《画家と裸婦》1953 年
油彩、布　当館蔵　第 2 回日本国際美術展

13. 伊藤継郎《阿蘇の赤牛》1961 年　油彩、布　当館蔵

14. 伊藤継郎《帽子をかぶった男》1970 年頃
水彩、パステル、方解末、紙　当館蔵

※章タイトルや出品作品は、都合により変更する場合があります。

作家紹介

伊藤継郎 Ito Tsuguro ／ 1907-1994 年

大阪市に生まれる。1923 年松原三五郎主宰の天彩画塾、翌年赤松麟作主宰の赤松洋画塾にて学ぶ。1928 年に芦屋に転居。1930 年第 17 回二科美術展覧会で初入選、1937 年の第 24 回展で会友に推挙される。1941 年に二科会を退会し、小磯良平や猪熊弦一郎らの誘いで第 6 回新制作派協会展に出品し会員となる。以後、この会を拠点に活動を続ける。1944 年には満州に出征し、終戦後約 1 年のシベリア抑留を経て 1946 年夏に復員。1947 年頃からは、幸運にも戦火を逃れた芦屋のアトリエに小磯や田村孝之介、小松益喜らの画家仲間、竹中郁や妹尾河童らの文化人が集い、研究会やデッサン会が行われた。また新制作協会の研究所が置かれ、白髪一雄や村上三郎らが通ったほか、絵画教室が開かれ子どもから大人まで多くの人々が学んだ。1948 年には吉原治良ら芦屋市在住の芸術家たちと芦屋市美術協会を結成し、芦屋市展や童美展の審査員を務める。1961 年より浪速芸術大学(現・大阪芸術大学)、1965 年より京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)等で教授を歴任し後進の指導にあたった。1969 年芦屋市民文化賞、1990 年には兵庫県文化賞を受賞。

当館では 1991 年に回顧展「画業 60 余年の歩み 伊藤継郎」を開催した。作品 64 点および多数の関係資料を収蔵している。

制作中の伊藤継郎、年代不詳

関連イベント

(1)講演会

「新制作派協会の戦前・戦中・戦後 ―創立期会員、神戸・阪神間の会員の歩みとともに―」

講　師 ： 廣田生馬氏(神戸市立小磯記念美術館 学芸担当係長)

日　時 ： 6月 11 日(日)14:00-15:30

会　場 ： 芦屋市立美術博物館 講義室

定　員 ： 60 名(予定) ※申込不要、直接会場へ

（2）ワークショップ「継郎先生の絵画教室―静物画を描こう！」

講　師：吉村有子氏（アーティスト）

日　時：6 月 25 日（日）11:00-16:00

会　場：芦屋市立美術博物館　体験学習室

対　象：小学生以上、10 名　※事前申込制。6 月 10 日（土）締切。応募者多数の場合は抽選。

参加費：500 円

持ち物：使いたい絵具や画材（カンバスはこちらで用意します）。汚れてもよい服装。昼食、飲み物。

（3）学芸員によるワークショップ「伊藤継郎の作品を模写しよう！」

講　師：川原百合恵（本展担当学芸員）

日　時：5月 27 日（土）11:00-16:00

会　場：芦屋市立美術博物館　体験学習室

対　象：中学生以上、15 名　※事前申込制。5月 12 日（金）締切。応募者多数の場合は抽選。

参加費：500 円

持ち物：絵具（模写するのは油彩の作品です。カンバスはこちらで用意します）。汚れてもよい服装。昼食、飲み物。

（4）鑑賞＆スケッチ会「伊藤継郎が愛したモチーフ・動物を描こう！」

講　師：川原百合恵（本展担当学芸員）

日　時：〔第 1 部〕作品鑑賞会　@芦屋市立美術博物館　5月 13 日（土）14:00-15:00

〔第 2 部〕スケッチ会　@神戸市立王子動物園　5月 14 日（日）9:30-12:30　※少雨決行。荒天中止。

対　象：小学生以上、15 名　※小学生の参加には保護者の同伴が必要。両日とも参加いただける方のみ応募可。

※事前申込制。4 月 29 日（土）締切。応募者多数の場合抽選。

参加費：100 円（保険代）、〔第 1 部〕作品鑑賞会の際には要観覧券

別途、神戸市立王子動物園の入園料（大人 600 円、中学生以下無料）

（5）学芸員によるギャラリートーク

講　師：川原百合恵（本展担当学芸員）

日　時：4月 22 日（土）、5月7日（日）、6月 17 日（土）　各回 14:00-15:00

会　場：芦屋市立美術博物館　展示室

対　象：どなたでも　※申込不要、直接会場へ

（6）対話型鑑賞会「おはなししながら継郎さんの絵を見よう！」

講　師：川原百合恵（本展担当学芸員）

日　時：5月5日（金・祝）14:00-15:00

会　場：芦屋市立美術博物館　展示室

対　象：中学生以下　※申込不要、直接会場へ

【申込について】

＊（1）、（5）、（6）は申込不要。参加費無料（ただし（1）、（5）は要観覧券）。

＊（2）～（4）は事前申込が必要。材料費等が必要です。お電話（0797-38-5432）かメール（ashiya-bihaku@shopro.co.jp）にて、イベント名、お名前（お子さまの場合は学年）、ご住所、ご連絡先をお伝えください。応募多数の場合は抽選。

［お問い合わせ］
芦屋市立美術博物館
〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-25　　FAX:0797-38-5434
企画内容に関して／担当学芸員 川原百合恵　TEL:0797-23-2666(学芸直通)
画像貸出等、広報について／総務課 乾紀子　TEL:0797-38-5432(代表)
◇ホームページ:ashiya-museum.jp
◇Facebook:芦屋市立美術博物館　◇Twitter:@ashiyabihaku

[アクセス]
徒歩:阪神電車芦屋駅から南東へ約 15 分
阪急バス:「新浜町」または「芦屋市総合公園前」行き(31・32・35・36・131 系統)乗車、「緑町(美術博物館前)」停留所下車、徒歩 2 分(バスのりば)阪神電車芦屋駅 南側2番のりば ／ 阪急電鉄芦屋川駅 南側5番のりば ／ JR 神戸線芦屋駅 北側5番のりば
併設駐車場:当館をご利用の方は 1 時間無料。
館内受付で駐車券をご提示ください。30 分 100 円(8:00-20:00)